2

全日本トラック協会対談シリーズ

社会との共生図る トラック輸送業界

生活物資の輸送を担うトラック輸送業界は、社会的責任として、安全性の向上を図るための安全性優良事業所の認定や災害時の緊急物資輸送などにも積極的に取り組んでいる。全日本トラック協会の中西英一郎会長と、声優でエッセイストのほか、築地魚河岸の若おかみとしてトラックとの関わりも深い平野文さんとに「トラック輸送の使命と役割」をテーマに、前回に続いて語ってもらった。（司会は毎日新聞社東京本社・川口裕之）

安全・安心な輸送のために

――安全な輸送に向けた取り組みについて教えてください。

中西　トラック事業者は常に事故防止を最優先課題と考えています。そこで業界全体の取り組みとして安全性優良事業所（Gマーク）認定制度を導入し、業界内の地位向上とともに、安全対策を積極的に推進しています。Gマーク制度は今年で5年目を迎え、全国8万6000事業所の約1割程度が認定されています。Gマークのことを一般消費者の皆様にも広くご理解いただけるよう、少なくとも全体の5割ぐらいまで普及させたいと考えております。この制度は、ドライバーの地位向上という問題にもつながっていくと思っております。荷主の皆様にもこれを取得した事業所を優先的に使ってほしい、とお願いしています。

Gマーク

――平野さんは、安全についてはどう考えてますか。

平野　車の運転に関しては、やはり私は流れに乗るということをすごく気をつけています。自分の車の運転で渋滞を招かないように心掛けています。もう一つは、免許を取った時、父に教えられた「三つのミラー（左右ドアミラー、ルームミラー）を意識しながら運転できるようになるには、10年ぐらいかかる。まわりを意識して運転することを心掛けるように」ということです。もう免許を取って30年以上になりますが、今でもハンドルを持つと、必ず〝三つのミラー〟を意識して、安全運転を心掛けています。このGマークというのも、消費者から見て「いいトラックなのね」「いい事業所なのね」と分かりますものね。色もデザインも分かりやすくてきれい。ホテルで泊まる時にこういう安全性を示すマークを意識し、利用したことがありますが、この制度ももっと浸透していくといいですね。私も何か機会があったら話題にします。

中西　よろしくお願いします。お客さまのほうから「必要だ」というふうに言っていただければ、事業者も必然的に取らざるを得ません。当初は大手事業者が多かったのですが、最近は中小の事業者も増えてきました。裾野は確実に広がっています。何としても増やしていきたいと思います。

社会との共生が大テーマ

――女性のドライバーも増えているようですね。

中西　そうですね。トラック業界は男社会と見られがちですが、私どもも、もっと女性の活躍の場を考えなければいけないですね。

平野　そのためにも、協会も女性職員をもっと増やしていただいて（笑）。河岸なんかもやはり、男社会ですよね。私が河岸で好きなのは、近代的な封建制度を持っているところです。男の役割は何である、女性はこういうことをやったほうがいいというのを、何となく各人がわかっているんですね。私は活動的な女性を見るとかっこいいな、と思います。女性ドライバーをもっとアピールしてもいいかな、と思っています。

――災害時には緊急輸送をしていますね。

中西　今年の7月に起きた中越沖地震では、新潟県知事から「物資を災害地へ運んでほしい」と要請がありました。各都道府県とトラック協会では、普段から取り決めができていて、災害時に要請があると、ただちにトラックを出して、生活に必要な食品、毛布、簡易トイレ、テントなどの緊急支援物資を運ぶようになっています。それもただ届けているのではなく、どこにどれだけ物資を運ぶかを整理する必要があります。こういったことは物流の専門家でないとできません。3年前の中越地震の時には情報が整理できず、倉庫に物資が山積みになって、必要なところに必要なものを届けることができなかったりとか、現地で混乱がありました。これを教訓として、今回の地震では、トラック事業者が荷さばきを行うこととなり、スムーズな対応ができました。

感謝の言葉を忘れずに

――平野さん、これまでのご感想は。

平野　仕事をしてよかったなって思うのは、私は「ありがとう」って言われることですね。物流って、本当になくてはならない仕事ですので、災害のときにももちろんですけれども、普段から、私たちの生活を支えるトラックドライバーの皆さんに「ありがとう」っていう言葉を必ず言いたいなというのを、感じましたね。「ありがとう」って言われるとやっぱりうれしいので、もっと喜んでもらおうと思いますよね。だから、そういう感謝の言葉は言わなきゃいけないし、言いたいなと思います。

中西　いまの言葉は、実際にお仕事を河岸でやっておられ、物流の役割を理解しているからこそ出てくると思います。当たり前のことと思われてると、そういった言葉は絶対に出てきません。

平野　それは河岸の人に教わりました。自分たちがどうされたらうれしいかというのを、常に考えています。だから少なくともドライバーさんにはよく、「ありがとう。ご苦労さま」と言うようにしています。

平野　文
3歳から舞台を踏み、12歳でテレビドラマに出演。78年深夜放送「走れ歌謡曲」のディスクジョッキーを担当後、アニメ・洋画の吹き替え、ナレーションの他リポーターとしても活躍。89年築地魚河岸の仲卸業三代目と結婚、魚河岸の若おかみも務める。

中西英一郎
全日本トラック協会会長
日本ロジテム株式会社会長

トラックは変わりつづけます。生活（くらし）と環境を守るために。
社団法人 全日本トラック協会
http://www.jta.or.jp